

## 【パネル・ディスカッション】

### マオリの文化的資源

澤田 真一（弘前大学人文学部准教授）

どんなにぜいたくに使用しても決して枯渇することのない資源があることをご存じでしょうか。残念ながら、この資源は豊かにあるにもかかわらず、ここ日本社会においては軽んじられ、ほとんど活用されていません。

その資源とは、古くからの文化と伝統を誇りとする先住民族や民衆が実生活の中で紡ぎ出してきた生きるための思想です。長い期間にわたって彼らが蓄積してきた生き延びるための知恵は、神話や儀式、生活習慣の中に保存されています。宗教学者、中沢新一は「神話は人間が最初に考え出した最古の哲学である」と言っています。

それらを非科学的、非合理的、非現実的といって切り捨てるのではなく、人間と人間、人間と自然との関係について考え抜かれた思想としてとらえるときに、私たちはそのような知を文化的資源として活用することができます。

今回、ニュージーランドから学べることとして私が皆さまに提示したのは、ニュージーランドが先住民族マオリの知恵を文化的資源と見なしており、それらを学ぶことでヨーロッパ中心主義に固執しない、多様な文化に対して開かれた新たな主体として自らを更新しようとしている点です。

『クジラの島の少女』で知られるマオリ人作家ウィティ・イヒマエラが、同じく海辺を舞台にして書いた作品に「ザ・シーホース・アンド・ザ・リーフ」という短編があります。この作品にはマオリの自然観が豊かに描かれています。『クジラの島の少女』の15年前に出版されたこの

作品の主人公は、マオリの少年タマ・マハナです。彼はイヒマエラ自身の少年時代が投影されたキャラクターです。

子どもたちに良い教育と就職のチャンスを与えるために、タマの両親は住み慣れたマオリの村を出て、都市で仕事に就きます。週末に海辺で村の親戚や友たちと泳いだり、魚を捕ったり、話をしたりするのが彼らにとってマオリとしての自分を再確認する大切なひとときでした。タマの父親は、パケハの学校に通う息子に、そこでは決して教わることのないマオリの価値観を教えます。この親子にとっては海が教室であり、そこでは遊びと教育が一体化しています。

海で見つけたタツノオトシゴを子どもたちは家へ持ち帰りたいと駄々をこねます。けれども、そういう子どもたちに対して、タマのお父さんはこのように言ってきかせます。「タツノオトシゴは海の中においてこそ一番美しい。海がタツノオトシゴに命と美しさとを与えている。そこから取り出されると、命と美しさは損なわれてしまう」

海は愛情、アロハの対象です。海と人間との間には互恵的な関係が存在しています。「私たちが海を敬う限り、海は私たちが養い続けてくれる」具体的に何をすべきかについては、「必要な分だけ捕りなさい。魚たちの住環境を変えたり、壊したりしてはいけない。海を汚してはいけない」こと、さらに海が与えてくれた恵みである魚や貝をそこに集まった多くの人たちの中で分かち合うことの大切さを、父親は身をもって教えます。分かち合えば無駄はほとんど出ません。

ところがある日、海に異変が起きます。にぎわっているはずの海が空っぽで、誰一人海の中には入っていません。彼らは立て看板の前で黙っています。その看板にはこう書かれてありました。「この海から魚を捕って食べるのは危険です」海は工場排水で汚されてしまいました。海底のパイプから流れ出る廃液で海は黄色く濁り、その濁りがねじ曲がった

指のように、タツノオトシゴの住む岩棚を取り囲んでいきます。

お父さんの口からは怒りの言葉が漏れます。「土地の次は食物か」これはパケハに向けて言われた言葉です。このとき、命と美しさを与えてくれる住処である岩棚を追われていくタツノオトシゴの姿が、マナに満ちあふれた先祖伝来の土地を追われたマオリの姿に重なります。タイトルにあるタツノオトシゴと岩棚の関係は、マオリとマオリの土地の関係の比喩であることが分かります。

マオリの老女が海に対する哀悼の歌を歌います。その歌が終わると、父親は大きなよく通る声で海にこう語りかけます。「海よ、われわれはあなたに思いやりを示さなかった。われわれはまず土地を毒し、今度はあなたのふところに毒を流し込んでいる。われわれはあなたへの愛を失い、あなたが育む命への敬意を失った。友よ、われらを許したまえ」

父親は海を「あなた」と呼んでいます。「友」と呼んでいます。海は“it”ではありません。人間と海との間には、我と汝という倫理的な関係が存在しています。マオリにとって自然は支配、利用すべき他者ではありません。彼らにとって、人間と自然は非対称的な関係にはありません。

ここで皆様の注意を喚起したいのは、父親が海を汚した責任主体の中に自分を含めているということです。直接的に海を汚染したのは白人です。それなのに父親は“**They have been unkind. They have poisoned.**”とは言わずに、“**We**”（私たち）という言葉を使っています。それはなぜでしょうか。

白人入植以前のアオテアロアの最初の法のことを、マオリはティカンガ・マオリと呼びます。ティカンガ・マオリとは、マオリ的価値観・倫理観に基づいて定められた行動規範のことです。ティカンガ・マオリの第一の目的は調和です。すなわち、人間と人間、人間と環境、人間と歴

史との間の適切なバランスを保つことです。

ワイタング条約第2条によって、ティカンガ・マオリは保護されており、いまだに有効であるとマオリはとらえています。自然環境に対する人間の使命は特にカイティアキタンガと呼ばれています。カイティアキというのは、ガーディアン（守護者）、あるいはトラスティー（受託者）という意味です。

人間は自然に対する責任を負っています。自然のバランスが失われた場合には、その調和を取り戻すことが求められます。カイティアキタンガが発動されるのは自分が住んでいる地域においてです。だからこそ物語に登場する父親は自分が海を汚染したか・しなかったかに関わらず、そこに自分が暮らしているという、ただその事実に基づいて、破壊された環境に対する責任を引き受けるわけです。子どもは親の姿を通して、そのことを学びます。

このマオリのカイティアキタンガの概念がニュージーランドの環境法には活かされています。ニュージーランドの「自然資源および天然資源についてのサステイナブルな管理を推進すること」を目的として制定された1991年の資源管理法（the Resource Management Act）には、実際にティカンガ・マオリ、カイティアキタンガといったマオリ語が使用されており、それぞれ「マオリの習慣に関わる価値観及びその実践」（Maori customary values and practice）、「守護者としての務めを果たすこと」（the exercise of guardianship）と定義されています。

法の内容と実際の適用については、平松紘先生が『ニュージーランドの環境保護－「楽園」と「行革」を問う』の中で詳しく論じておられますので、私はここで別のもう一つの魅力的な文章を皆さまに紹介したいと思います。配布資料をご覧ください。この魅力的な文章は、ザ・ニュージーランド・マオリ・ कांग्रेस（The New Zealand Maori Congress）

が「ア・ステートメント・オブ・エンヴァイロメント・プリンシプルズ」(A Statement of Environment Principles)と題して、1991年に作成した環境政策における原則についてのステートメントです。この宣言書は翌1992年の国連環境開発会議(地球サミット)に提出されました。この中にはマオリの神話に端を発する価値観や哲学が凝縮されています。全12項目のうちの幾つかをここに取り出してきました。

その第一には、こう書かれています。「環境の管理は、われわれ祖先の始源(はじまり)、資源の文字通りの具現したもの及びわれわれの終(つい)の休息の場としての環境を、神聖な統合体と見なす敬意に基づいて行われるべきである」環境は神聖な統合体です。マオリにとって空は神です。大地も神です。森も神、海も神です。それぞれ、ランギ、パパ、タネ、タンガロアといった名前が配されています。

第二には、「われわれは自然環境を、われわれがその一部であるところの命を持った体系として扱わなければいけない。他者の人格を尊重するのと同じように、自然をわれわれは敬わなければいけない」とあります。人間は自然の一部であり、自然の上に立ち支配するものではありません。

3番目は、大変興味深いです。「われわれが今委託されている環境に関して、われわれは他世代への責任を有している。現世代の人間は過去の世代と未来の世代の人間に対して責任を有している。この自然環境は祖先から手渡されたものであって、われわれはそれをわれわれの子孫に、少なくともわれわれがそれを受け取ったときの状況を損ねることなく渡さなければいけない。遺産の価値を向上させるためにできることはすべて行わなければいけない」この世代を超えた責任感こそは、現在の日本に最も欠如している視点ではないかと思えます。

4番目を飛ばして、11番目に行きます。「良き生存者として、われわ

れは無駄を出さないという倫理をすべてのことに適用することを学んできた。その倫理は個人が有するエネルギー、エネルギーそれ自身、人々の才能、周りの世界の資源に対して適用しなければいけない。他者がごみと呼ぶものさえも無駄に扱ってはいけない」ここで面白いのは、この無駄を出してはいけないという倫理を人々の才能にまで広げて適用している点です。ニュージーランドは、国民のポテンシャルが最大限に活かされるために個人の才能の発現を妨げる障害を取り除くことに力を注いでいます。女性、先住民族、障がい者、外国人、こういった人たちに対する政策を見れば分かると思います。

そして、最後ですが、「生態学的原理であるところの全体論は、人間の思考がつくり出したものでも科学が発見したものでもない。それはわれわれの神話が示すとおり、世界の始まりから存在していた。そして、その中には、人と人、人と神々、人と自然といった関係性についての倫理も含まれている」私たちは独自に独立して存在しているのではありません。すべてがつながっており、互いに影響を与え合いながら存在しています。人間は大きな全体の中の有機的な関係にある一部分です。ですから、自然を破壊することは人間を破壊することに等しいのです。

1975年から1979年まで、ニュージーランド政府で民族問題の調停の任に就いたハリー・ダンズィーは、マオリ文化とヨーロッパ文化の優れた部分を取り入れることで、ニュージーランドは独自の豊かな文化を発展させていくことができると信じていました。彼はまた、劇作家として、パリハカにおいて、テ・フィティによって展開された政府の土地収奪に対するマオリの非暴力抵抗運動に材を取った「テ・ラウクラ」という作品を残しています。この劇の終盤で、不当に白人に逮捕され、獄中生活を終えて、破壊、略奪されたパリハカに戻ってきたテ・フィティを出迎えた群衆を前に、彼はこのように言います。「パケハが正しくないとき

には、私は霊の武器をもって彼と戦おう。だが、私は彼がただパケハであるという理由のみで戦うことはしない。私たちは、パケハもマオリも皆神の子どもたちである。私は神の子どもたちの間に悪が入り込むことを望まない。かつて私は、パケハが彼らの国に帰るであろうと思っていた。だが、今はそうではないことを知っている。だから、今あなた方に言う。悪しきパケハのみを見て、全てのパケハがそうであると判断してはいけない。私が心から望むことは、パケハとマオリが相共に平和に助け合って暮らしていくことである。白人からマオリは知識を教わり、マオリは白人が強欲という罪に打ち勝つことができるよう助けるのだ」

ニュージーランドはマオリの思想を国政に導入することで、資本主義を相対化し、その暴走を抑えようとしているように見えます。

東日本大震災後の政治が迷走する中、私たちが日本の 50 年後、100 年後の姿を想像するのは非常に困難です。しかしながら、ニュージーランドはマオリの知を文化的資源、未来へ向けての生き方の資源として活用することで、持続可能な、より豊かな国の未来図を描くことを可能にしているように私には思われます。